

聖と俗のとらえ方

西洋の宗教社会学者への日本の宗教文化による提案

デビッド・リード

およそ二千年間に渡って、「世俗化理論」は近・現代の宗教変動をめぐる討論において圧倒的な影響力をおよぼしてきたのである。この理論は、理解を深めることや研究に方向づける意味においても、「宗教主義者」と「世俗主義者」とが手を組んで研究を進める意味においても、かなり役に立つものとされた。そのために、批判する者の発言権が認められても、その批判の内容を認める余地がほとんどなかったといえよう。

しかし最近、世俗化理論に対する批判は、益々きびしくなっているのである。その批判には色々あるが、ここでは三つの点にしばって述べることにする。

1、肝心の「世俗化」という用語には、はっきりとした定義が欠けている。玉虫色の用語で、頼りにならないものである。

2、「世俗化」という用語は宣伝的内容をもつものである。歴史の流れにつれて宗教が減少し、最終的には消えてしまうであろうことは、その前提である。ある歴史観にとってこの前提は都合である。

別の歴史観にとってこの前提は危機感の原因になっている。いずれにしても、公平無私な研究の妨げになっていることは事実である。

3、継続する、または復活する宗教的活気を説明

するのには、世俗化理論は甚だしく無力である。

世俗化理論にはもう一つの、より基本的な大前提がある。つまり、聖と俗とを対立的なものとしてとらえる必要がある、という大前提である。この絶対的不連続を意味する大前提は、世俗化理論をめぐるほとんどの討論の背景にある。ここでは、この大前提を検討してみたいと思う。

対立的な聖俗関係概念

世俗化理論はヨーロッパの地に生まれた。ヨーロッパの宗教文化においては、世俗化理論は、不断 Thomas Luckmann がどこかでいう「教会の勢力衰退」と結び付けられてきた（これはルックマン自身の見解ではないけれども）。従って、現代のヨーロッパにおけるキリスト教の衰えつつある勢力を説明するための試みとして生まれたのである。

おそらくキリスト教（もつと広くいえば、ユダヤ教・キリスト教的な伝統）との関連があるからこそ、世俗化理論は初めから聖と俗とが二者択一的なカテゴリーであるこ

とを意味するこのほとんど問題にされなかった大前提を頼りにしてきたのである。

ユダヤ教もキリスト教も、創造主とその創造とをはっきり区別していることは、申すまでもない。その証拠に、旧・新約聖書の次のような言葉を連想する。

わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、
わが道は、あなたがたの道とは異なっていると
主は言われる。

天が地よりも高いように、
わが道は、あなたがたの道よりも高く、
わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。

（イザヤ書五五・八一―九）

人々の間で尊ばれるものは、
神のみまえでは忌みきらわれる。

（ルカによる福音書一六・二五）

創造主と創造との区別から、聖と俗との関係が絶対的

対照であると考えようになることは、そんなにむずかしいことではない。この対照関係の考えは、ウェーバーのカリスマ分析にもデュルケムの宗教定義にも含蓄されている。宗教社会学においては、このような考え方は長い間もちろんのことでされてきたが、日本の宗教学者の間では、必ずしも全面的に認められていない。西洋の標準でいえば、日本の宗教学者のこの対照的な考え方に對する批判は、たいいてい弱められた、明示的よりも暗示的なものであろう。しかし二つばかりの例を挙げれば、役に立つかも知れぬ。

柳川啓一氏の示唆に言んでいる「祭の神学と祭の科学」（会津田島祇園祭覚書）（一九七二）にはいろいろな次元があるが、聖俗関係を対照的に見る考えに對する不満から生じた模索的な論文として読むことは、充分可能である。その後柳川氏が編集した『聖と俗のかたち』（一九七八）のまえがきにおいて、その暗黙的な批判を、もう少し徹底的な形で現した。

「聖と俗のかたち」とは、多義をこめた象徴的表現のつもりであった。聖と俗、非日常と日常の対立は、

宗教的世界観の根本にあると考えられている。しかし、宗教の内容が変化すれば、こうした区別はとりはられるのではないか。聖は、きびしく、おそろしいものではなく、日常の世界と仕切りのない、もつとあたり前な、優しいものではないか。それが一方の極のとらえ方である。また、別の意味もふくめている。聖と俗は、二元的に對立しているといつても、相互に補足して一体をなしている。機能としては日常の体制を精神的に補強しているに過ぎない。人間はおのれの変革のためには、聖と俗の「かたち」に飛ばなくてはならない。その意味もこめられている。

この短い文章において、聖と俗との関係を、宗教の内容によって、対照的に考えることより、補足的に考えた方が適切であると、柳川氏が示している。日本の宗教がその一例であると言っていないが、そのような考えが頭にあったと容易に推測できる。

また桜井徳太郎氏は、はっきりと日本文化に関連して、聖と俗にあたるハレとケとが、ある意味で内部転換の可

能性を含めると指摘するのである。この聖と俗の相互転換の可能性は、桜井氏によれば、「絶対的対立とみるキリスト教社会の聖俗観念」を根拠に想像がつかないであろう（一九八六、五〇頁）。ここにも、聖と俗との関係を絶対的対立とみなす考えに対する間接的な不満が現れている。

日本人の宗教学者がキリスト教に由来する観念や価値の影響が少ない文化に育成されている事実からすると、歴史的にキリスト教からの影響が少なくない西洋の諸文化において、またそこではほとんど問題にされなかった連続概念に出会った日本人の宗教学者が一種の不穩を経験することは、なにもびつくりすることではない。しかしおもしろいことに、この対立的な聖俗概念は、現在、西洋においても問われているのである。従って、日本にしても西洋にしても、宗教変動理論を發展するための根拠としての絶対対立的な聖俗概念は、不十分のようである。

そこで、聖と俗との関係を再概念化するためには、どのような資源があるのかという問題が起こるのである。

日本において表現された可能性の一つを、残り少ないページ数に検討してみたいと思う。

聖俗の相関関係概念

桜井氏の含蓄のある論文「ハレとケとケガレの相関」（一九八六）に、すでにちよつとふれたのである。初めて出版されたのは一九七四年であるが、この短い論文において、日本の民間文化による聖俗関係の概念が、はっきりと表現されている。ここではまず、桜井氏の論文の要点を手短かに述べて、それからその内容の一般的に適用する可能性について検討してみたいと思う。

ハレとケ、聖と俗についての従来の通説、つまり二項対立的な通説に対する反省が出ていることは、桜井氏の出発点である。デュルケム流の聖俗二元観の代わりに、三元相関的な概念が要されている。この三元とその相互関係を説明することは、氏の論文の目的である。

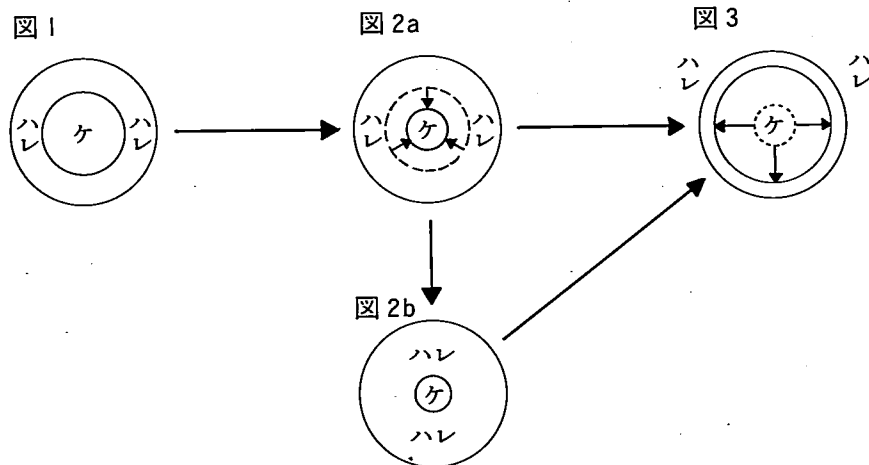
最初の話題はケである。ケが指摘するのは、共同体生活の日常性や日常態であると規定して、桜井氏がこの言葉に関する語義学的な解釈を短く提供するのであるが、

ここでは最も大切なのは、その結論である。つまりケが意味するのは、キ・気・エネルギーである。しかもこのエネルギーは単なる物質的なエネルギーではなく、造化の神によって与えられたエネルギーである。ケは、人間が共同体において通常の生産的生活を送ることを可能にする霊力である。

しかし、共同体生活の通常態を保つのに必要なエネルギー水準は、絶え間なく続くようなものではない。燃料と同じように減少するのである。エネルギーの枯渇状態はケガレ（ケ枯れ）である。この減少した状態は、ただの個人の弱さとか無気力とかの問題ではなく、共同体の問題である。

聖の次元を意味するハレは、生産的共同体生活にとって欠くことができないエネルギーの根源である。人間がいかにかこの霊力を受けるのかといえば、それは共同体の行事・儀礼に参与することによるものである。この儀礼は共同体生活の通常態を可能にするのである。

ここに概念化されているのは、止まることがない循環的過程である。この過程は、通常のエネルギー状態から



エネルギーの枯渇状態へ、また宗教的儀礼に参与することによってエネルギーの補給された状態へと、移り変わるものである。日本社会において聖俗関係は、対照的で密閉された区画の関係ではなく、規則的に循環する相関関係である。

一歩進んで、聖と俗とは一種の「相互転換性」がある。とさえ、桜井氏が論ずるのである（一九八六、五〇頁）。このびっくりさせるような表現の意味を説明するために、桜井氏が用意した図を使った方が良いでしょう。図1は安定した生産的共同体生活における聖俗関係を示すものである。図2aはこの共同体の中の減少しつつあるエネルギー水準を示すもので、図2bが意味するのは、世俗的次元のエネルギー水準が減少し霊力の要求が増える時、人々が儀礼的活動のために余りにも夢中になるので、世俗的次元が聖なる次元に圧倒されそうである。図3は世俗的次元の霊力に満ちた状態を指すのである。この状態はエネルギー循環の最終点であると同時に、その再出発点である。

桜井氏は続いて聖の次元に関連して、健康・繁栄・幸

福を目指すプラスの儀礼と、病気・禍難・不幸を避けるためのマイナスの儀礼とを区別するのであるが、ここでは細かくふれる必要はない。

全体から見ても、特に重要と思われる点は二つである。

(1) 聖の次元は俗の次元を取り巻いて、仕切りなく接するのである。

(2) 聖も俗も拡大したり縮小したりするもので、俗の領域が縮小すればするほど聖の領域が拡大し、またその反対の動きもある。

エネルギーの減少や補給、聖俗の「範囲」の拡大や縮小概念が仮定されれば、ある時に俗の次元に属するものが別の時に聖の次元に属しうることは、当然の帰結になるし、その反対ももちろんのことである。これが桜井氏がいう「相互転換性」の意味である。

要するに、ここにあるのは、静止的な構造ではなく、ダイナミックな過程を意味するイメージである。いいかえれば、ここにあるのは個別的で対立する二つの実在ではなく、一つの実在、しかもその次元が相関関係を示す一つの実在を意味するイメージである。この理論的枠組

みは、日本の民俗学者がその研究を進めるための概念を組織的に述べる、いささか地味な試みとして始まったのである。今度は、その一般的に適用する可能性について考えてみたいと思う。

一般的に適用する可能性の問題

この数年間、日本の宗教を研究対象にする学者の注目を集めた問題の一つは、世俗化概念の日本社会に適用する可能性の問題である。ここでは、形勢が逆転している。ここで問題となっているのは、ダイナミックな干渉過程の中の相関関係による聖俗概念が、日本以外の社会にも役に立つ可能性をもっているのかである。

世俗化理論は、キリスト教が文化史において重要な役割を果たしてきた地域内に生まれ、また主としてキリスト教に関連する変動を説明しようとするものである。ここで取り扱わなければならない問題の一つは、この新しい概念が本質的にキリスト教と矛盾するかどうかである。

前に、聖俗関係を対立的なものとしてみなす概念には、

聖書による根拠があることを指摘した。しかし今度は、その二分法的な概念が聖書の唯一の概念ではないことを強調した方が適当であろう。モーセと燃えているしばについてよく知られている箇所によると、神はそのしばの中からモーセを呼んで言われた。「ここに近づいてはいけない。足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである」(出エジプト記三・五・使徒行伝七・三三参照)。ここには、はっきりした聖俗の区別があるが、その区別の根拠は、場所の質によるものではなく、むしろその場所に神がいることによるものである。ある所に神がいることにするか、いないことにするか、ある時にいることにするか、いないことにするか、神の自由によるものである。どんな場所でも聖なる場所または俗なる場所になり得るし、時には聖、時には俗なる場所になり得るものである。

これは聖と俗の区別を抹殺することを、決して意味しない。むしろキリスト教の伝統においてこの別々の次元が相関関係にあるという概念を認める余地があることを意味するのである。聖書からの他の資料、または有名な

神学者の見解によつてこの意見を支持することが余りにも簡単なことで、無用であろう。しかし原則としては、聖と俗とが相関関係にあるという概念は、キリスト教の伝統と矛盾しないことを帰結することができる。

それに対して、日本の共同体を中心とした祭りに類似する西洋の宗教現象が比較的少ないもので、従つて考慮中の概念は一般的に適用しない、という異議が予想されるのである。しかし、もし「共同体」を桜井氏がいうムラに限らず、どこの都市化された社会においても数多くの人間を動員する近隣共同体、仕事場共同体、種々の自発的結社として理解し、また「祭り」を聖なる次元向けの共同体によつて組織化されたすべての儀礼的活動として理解すれば、この異議は消え去るのである。

それより大切なのは、もし聖俗の次元が本質的に相関関係にあるという概念を用いる場合、世俗化概念はどうなるのか、ということである。これは難問である。なぜかという、この問いを取り扱うために、まず「世俗化」ばかりか、「宗教」も定義する必要があるが、この謎に対して一般的に認められている解決を出した人

は、まだ一人もないからである。宗教を組織化された現象としてみなすか機能的にみなすか、世俗化を組織化された宗教の衰退過程としてみなすか、または「聖なるコスモス」に由来している規範から社会構造の様々な部分が次第に自立してゆく過程」(Luckmann 1983, 198頁)としてみなすか、あるいはまた宗教と全く関わりがない人間を育成すると仮定される過程としてみなすかは、大変な相違をもたらすところである。もし世俗化が、聖と全く無関係の存在状態を生み出す過程であると理解されれば、聖俗の相関関係という概念が初めから問題にされないことは、もちろんのことである。しかし、その相関関係がひょっとしたら可能であるという考えがある場合、世俗化概念はある程度まで認められるであろう。この観点から考えると、世俗化を桜井氏がいうケガレ、つまり霊力の枯渇状態をつくりだす過程として理解することができるであろう。なお、世俗化概念はその規則的な循環の一面にしか当てはまらないことも、明らかである。他の一面、いいかえれば聖なる次元向けの儀礼的活動が主役を演ずる時の一面を指摘するために、耳なれた「聖化

過程」という用語を使った方が良いかと思う。聖と俗とが不可分で互いに関連のあるものであるという概念が、種々の扉を開くために役に立つ合鍵であると主張することは、この短い試論の意図ではない。しかし、日本においてかなり長いあいだ問題にされてきた聖俗の絶対的対立という仮定が西洋にも胸騒ぎを起こしているとすれば、また現存する資源を調査して聖と俗との関係を再概念化するためにどうすれば良いのかを考える必要があるとすれば、ここに紹介した概念は検討する価値があると言えよう。

参考文献

- トーマス・ルックマン Thomas Luckmann
 『見えない宗教—現代宗教社会学入門』(一九七六)
 赤池憲昭 ヤン・スィンゲドー訳。東京：ヨルダン社。
 Life-World and Social Realities. London: Heinemann Educational Books Ltd. (一九八三)
 桜井徳太郎
 「ハレとケとケガレの相関」(一九八六)
 宮家準・孝本貢・西山茂編集、『リーディングス 日本の社会学 19 宗教』。東京：東京大学出版会。(一九七四年の論文の再版)

柳川啓一

「祭の神学と祭の科学」会津田島祇園祭覧書(一九七二)
 「思想」五六九号(昭和四十六年十一月)、五七—七二頁。
 「聖と俗のかた」(「講座宗教学」第五卷)柳川啓一編。
 東京：東京大学出版会(一九七八)

(東京神学大学教授)